
駆ける、姫に賭ける！

友絵少尉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

駆ける、姫に賭ける！

【Nコード】

N0037Y

【作者名】

友絵少尉

【あらすじ】

近未来の日本。社会は、謎の奇病、“魔導少女症候群”の流行により、パニックを呈していた。発病した少女は、“魔導少女”と呼ばれ、未知なる魔導の力を発揮、制御できないこの力により、周囲に破壊をもたらしてしまう。事態収拾のため、国家に軍政が敷かれ、軍政異端審問局が法務省の外局として設置された。魔導少女を治癒するためには、その魔導エネルギーを消費させつづけるしか無い。このため少女たちを極限まで追い詰めるためのレースが考案された。“魔導少女迎撃競技杯”（インターセプション・カップ）である。

少女たちを追い詰めるべく、人工の魔導エネルギーが開発され、少年たちに与えられた。人工の魔導少年の誕生である。かくして今夜も、魔導少年が、魔導少女をレースマシンで追い込み、彼女らのマシンを撃破する過酷なレースが始まった。魔導少年のマミヤはそこで運命の美少女と出逢う。“魔導の姫”と呼ばれる少女と。

魔導少女狩り〜深夜の首都高速〜

少年の騎乗した魔導二輪装甲車輛は、時速三〇〇キロメートル超のスピードで東京、首都高速環状線を疾駆していた。

装甲のボディカラーはサーキットブルー。

車体は流麗なエアロフォルム、それでいて武装をもつが故の無骨さを兼ねそなえたシルエツトだ。

ヘッドライトのハイビームが前方の闇夜を切り裂いてゆく。

現在、魔導爆燃機関の出力は毎分、三万一二六五魔導力場展開アーデルハイトを記録、エンジンシステム異状なし、重力波制御システム異状なし、各種武装、火器管制システムやはり異状なし。

全システム、オールグリーン。

コクピットのコンソール、分厚い超硬化透明プラスチックのウインドシールドに守られて、魔導メーター、スピードメーター、各ディスプレイのモニタ画面がそう告げてくる。

オールグリーン。だから、狩れ、と命じられているかのようにだ、マシンに。

今夜こそ、魔導少女を狩れ、と。

ほんとうにマシンが命じてくるかのように、プレッシャーを与えてくるかのように、少年はそんな錯覚すら憶えた。

軽く頭をふってみる。第二次世界大戦時のナチス・ドイツ軍を彷彿とさせる形状のフリッツヘルメツト。

十五歳のまだ華奢な少年にはその重量が頸に重く感じる。

けれどその両眼には爛々と燃える光が宿っている。蒼白の光だ。魔導爆燃機関の内部で爆発、燃烧している魔導エネルギーとおなじ色の光だ。

走行中に本部からビデオ通信のコールが鳴った。

ディスプレイに男の顔が映しだされる。

整えられた優雅な白髪の持ち主だった。

『軍政異端審問局よりマミヤ曹長へ通達、マミヤ聞こえるか私だ』
「はい大佐」

『今夜こそ戦果を上げる、魔導少女のホウキをへし折ってやれ』
「了解しました（アイ・サー）」

『まったく貴様は返事だけは一人前だな』

大佐は苦々しい捨てる、ターゲットの？魔導少女？の現在位置を送信してきた。

それに彼女の戦績も、その子の騎乗する魔導二輪装甲車輛の主要諸元、魔導少女迎撃に必要な情報のすべてが開示されてくる。

極秘情報 彼女の名前、年齢、住所などの個人情報。それ以外のすべてが。

ターゲットの魔導少女は、今夜が初陣だった。

軽い相手、のハズだ。

思念を集中する、少年の、マミヤの意志に呼応して、魔導爆燃機関の回転が徐々に上昇してゆく。

出力、三万二〇二九アーデルハイド、三万二二一五……、三万二
三。

『マミヤ曹長つ、なんたるザマだ？ 一六戦目にもなってまだそれしか出せんのかつ、今夜敗北すれば貴様どうなるか分かっているんだろうなっ？』

大佐が罵声を浴びせてくる。

いつものことだ、聞き飽きた叱責の言葉を少年は受け流した。

午前三時過ぎの東京の街、マミヤ以外首都高速に車影は、無い。

警視庁交通機動隊と軍政異端審問局の合同部隊が交通規制を敷いてくれているからだ。

防弾仕様の前輪がアスファルトの路面を抉り、白煙を後方に残しながらマシンが奔る。

魔導少女のマシン迎撃、そのための専用魔導二輪装甲車輛、通称
ヤクトラント
獵犬。

いまスピードは時速三四〇キロメートルほど、重力波の干渉を周

困に与えながら、老朽化してすでに久しい首都高を駆けぬけてゆく。眼前にひろがるのは、快晴の暗闇の空。

突風が、時速三四〇キロで疾走するマミヤとヤークトフロントに殴りかかる。

彼の全身に空気が喰らいついてくる。痛くはない。痛覚は麻痺しているからだ。

重力波を右側面へ散布する。

同時に重心移動、マシンを寝かせ、右コーナーに突入する。

重力干渉を受け、対向車線のむこうがわ、首都高の強固な遮音防壁が波打って震動していった。

魔導の発する力を借り、右に吸いよせられる感覚になる。

まるで右半身が、何メートルも離れた遮音防壁と癒着したかのようだ。

さらに急減速、時速一〇〇キロまで落としてかろうじてコーナーを曲がる。

ふたたび加速をかける。

彼のヤークトフロントが江戸橋ジャンクションを通過、コーナーを曲がりきり、直線コースへ。

ヘッドライト、強烈なハイビームが路面と前方とを照らします。

遙か前方、見えてくる。

魔導少女の駆るマシンのシルエットが見えてくる。

マミヤ少年の駆るヤークトフロントが、ついに魔導少女のマシンを目視内射程に収めた。

火器管制システム、作動。

ヘッドマウントディスプレイの片眼鏡が自動操作で右目を覆って

ゆく。射程距離四〇メートル、ターゲットのマシン、時速一六〇キロで走行している。

ヘッドマウントディスプレイに覆われた右目に、目盛状格子が投影される。
レティキュル

加速にのみ使ってきた魔導エネルギーを攻撃に振り分けるときが

きた。

減速して、二〇ミリ機関砲に装填された呪法弾にエネルギーの充填を開始する。

火器管制システムの充填完了のシグナルが鳴ると同時に、前輪をガードする正面装甲板左脇の二〇ミリ機関砲をフルオート射撃した。フロントカウル
重厚な発射音、同時に空薬莖が排莖され路面にぶち巻かれてゆく。魔導少女も負けてはいない。

おなじく減速して、拡散重力場を後輪後方へ展開、呪導爆雷を四発、路面に投下すると彼女は一気に加速をかけた。

逃げ切りを図るつもりだ。

マミヤは一転、エネルギーをまた加速にふりむけながら、左右へハンドルを切る、ハイビームの光のなか、爆雷が乱舞してきた。

一発目を右にかわし、二発目、三発目、そして四発目の爆雷をかろうじてやりすこす。

すぐ後方ほんのコンマ数秒の差で、爆雷が起動した。

首都高速線上の大爆発、立てつづけに四回だ。

ヘルメット越しに爆音とアスファルトの焦げる不快な匂いに襲われた。

魔導少女は必死だ、逃げ切るしかない彼女にとって必死の、これは？競技会？だ。

「ごめんね」

マミヤは自分でも気づかないうちに、つぶやいた。

機関砲を再び連射した。

敵の拡散重力場に妨害され、弾道が曲がってゆく。

それを計算に入れたうちの二発、ターゲット後部装甲に二発命中した。

相手のマシンが黒煙を吹き始める、加速がやんで、徐々に距離が縮まってくる。

なおも魔導少女の駆るマシンが逃げる、必死に。

ヤークトフロントとは車種が異なる、逃げ切ることに特化した魔導

二輪装甲車輛。

ワイルトカッフェ
通称、山猫。

六万アーデルハイドは叩きだしているかも知れない。

それぐらい後部の四つの排気口から蒼白く美しい光が残光を残し
伸びている。

魔導エネルギーの光、それは魔導爆燃機関のまだ生きている証拠
の光だ。

マフラーのついていない排気口、マシンの叫び、魔女の悲鳴が深
夜、首都高に鳴り響く。

時間がもう無い。

少女が京橋ジャンクションで右に曲がるうとして、車線変更して
くる。

それを見越して、また呪法弾をフルオート連射、外した、わざと
外した。

外した砲弾はターゲットの装甲板の左をかすめ、飛翔、どこまで
もつづく首都高の防護フェンスに直撃、爆発をおこした。

呪法弾の残弾はすくない。

あとは強力だけれど、操作に強い思念集中を要する？呪法誘導ミ
サイル弾？があるけれど。

少女が京橋の右コーナーを曲がる直前、そのミサイル弾が蒼白い
魔導力の光を放ちながら、マミヤの後方から猛スピードで飛翔して
きた。

彼の右脇を素通りしていった。

ターゲットの少女が曲がったところでシルエットが目視内から消
える。

ミサイルが追尾してゆく。

爆発。

コーナーから直線に変わるあたりの路上、大爆発が起きた。

呪法誘導ミサイル弾がターゲットのマシンを、ワイルトカッフェ山猫を撃破したの
だった。

マミヤが火器管制ディスプレイを解除、右後方モニタを確認する。別の魔導二輪装甲車輛が、同僚の獵犬ヤクトフロントが走行していた。スピードを上げ、マミヤのマシンにびたり、並走してくる。

ボディカラーはムーンミストグレー、相手から通信が入ってきた。『減速すれば？ もうすぐコーナー曲がって弾着地帯に突入するよ』
なんとも軽い口調、放課後に学校の課題をひとり先に片づけ、余裕を見せてくる生徒の声音だった。

首都高速の悲鳴

二騎のヤークトフロントは減速して、京橋のコーナーを曲がった。
光景は無残だった。

魔導少女の騎乗していた山猫^{ヴァイルトカツェ}、大破して路上に残骸を晒している。
装甲カラーは派手なハーベストゴールド、その装甲板の欠片が首都高のLED照明に照らされ、虚しく光っている。

ふたりの獵犬^{ヤークトフロント}たちが急停車した。

マミヤは騎乗したまま、魔導少女を、路上でへたりこみ、肩を震わせている少女を見ていた。

ヘルメットのバイザー越しに見える少女は、中学生くらいだろうか？ 十五年次生 中学三年生 の自分とおなじ？

すこし若いかな？ 十三年次生か十四年次、そのあたりに思えた。

右のマシンに騎乗した大柄の少年はつかつかと少女にむかって近づいていった。

彼も、魔導少女も、ほぼ同じ服装に身を包んでいる、マミヤとおなじだ。

それはまるで極薄のウエットスーツのような、全身のシルエットを、ぴたり、露わにしてくる防護服だった。

薄く軽い、それでいて対呪法、対爆、抗弾、対NBC兵器の性能をもつ優れものだった。

魔導防^{マキアパンツァー}御兵装。一般にはパンツァーと略して呼ばれている。

魔導少女のパンツァーは炎に嬲られ、若干の機械油やスス汚れが付着しているだけだった。

背の高い獵騎兵は少女にむかって、

「軍政異端審問局の定める法令に基づき、君の体表面の視診を執行する、君にはすべての個人情報^{マルサンフタイチ}を秘匿する権利が与えられている、

僕は、君に関する知り得た情報^{マルサンフタイチ}の一切を漏洩しないことを宣誓する

……ええっと、時刻〇三二一、異端審問宣誓を終了、っと」

少女は震えながら、睨め上げてきた。
ヘルメットを乱暴に脱ぎすてる。

主に見捨てられ、路上に点々と転がっていった。
可愛らしい、可憐な少女の貌が現れた。両の瞳からは悔し涙を流している。

美しい金色の髪、青い瞳の白人の少女だった。

光っていた、少女の両の瞳も、蒼白に、元から青い瞳は、さらに蒼白に輝いていた。

三人とも、おなじ色、魔導の色だ。

同僚の少年は、ヘルメットのバイザーを跳ねあげてからじつくり、少女の顔を見て、胸のふくらみのシルエツト、それから下腹部、股なめらかなラインを描く太ももまで、順繰りに凝視していった。

嫌な目つきだった。極薄のパンツァー一枚を隔てた、その下の少女の体を透かし見ているかのような目つき。

彼は右の手首リストに巻いた極薄型の吸着式タブレットリスト・タブレット端末とにらめっこを始めた。

開示された情報をチェックして、

「ラッキーッ」

さもおかしげに口笛を吹いてきた。

「おいっ、マミヤツこの女の悪魔の紋章、左のおしりにあるぞっ」
「そうか」

「おいおい、なんだよっ喜べよっ、女のナマケツが拝めるんだぞっ」
「そういって、」

「さあ、マジアパンツァーを全部下ろすんだ、おしりが見える位置までね、あっ僕は鬼じゃあないから、うしろをむきながらで構わないよっ」

少女は何度も体を震わせながら、ようやく立ちあがった。慣れた日本語で、

「……ワタシ、これが初陣で、だからたった一試合で紋章が消えるとは思えないっ」

敗れても決して屈しない、そんな声で激しく訴えてくる。

「たしかにそのとおりだね、紋章はかたんには消えない、君のビョーキはすぐには完治しないんだ、だから見せてくれないか、君のおしりをね」

「でもっ」

「脱ぐんだ、僕は容赦しないよ？」

少女は屈辱に唇を噛みしめ、それから目元をぬぐい、彼をじっと睨んだ。

うしろをくるり、とむいて、右手首の吸着式タブレット端末を操作する。

愛騎とおなじハーベストゴールドの色をしたパンツァー、胸の前が上から、ふっ、と左右に開き始めてゆく。

彼はいてもたってもいられない、そんな様子で密着度を喪失したパンツァーの両肩に手をかける。

一気に腰まで引きずりおろした。

「っ」

少女の、屈辱の吐息。

その裸身、体全体から魔導力の光が、蒼白色の炎が躍り、周囲を照らします。

ママヤは、眼を背けた。

「ええと？ 左のおしり、と……ああ、まだ紋章、残ってるねえ、ちよつと薄れた感じだけど残ってるねえ……君、来週のレースも出場しないか？ 僕に負けてまた見せてくれよ、ナマケツをね」

それからわざとらしく、咳払いをひとつして、

「異端審問による身体視診検査をこれを以て終了します、着衣の乱れを直して構いません」

いけしゃあしゃあと云つてのけた。

少女はすぐさま、パンツァーを両手で引き上げ、さらけ出していた裸身をかくした。

また座りこんで、彼を睨みつけてくる。

彼はヘッドセットマイクにむかい、声高らかに戦勝報告の通信を始めた。

「こちらソルベ、ソルベ中尉であります、ターゲットのホウキをへし折りました、くりかえす、魔女のホウキをへし折ってやったぞー」

彼のヘッドホンから、軍政異端審問局オフィスのおおきな歓声が漏れ聞こえてきた。

ソルベという名の少年が自身の愛騎にもどってくる。意気揚々と大股で歩いてくる。

「下衆野郎」

マミヤがつぶやいた。

「……………ホウキをへし折るのは、勝利した猟騎兵の当然の責務だ、まあ上官として、いまの問題発言に対して寛大なところを見せてあげるよ、曹長くん？」

マミヤは自分より二階級上の同級生の顔に、ありったけの侮蔑をこめた視線を放った。

ソルベ中尉が、この三万アーデルハイドしか回せない無能野郎め、とそうささやいて、陰のこもった笑みをつくってくる。

嫌な笑みのまま愛騎のヤークトフロントにまた騎乗する。

上空から、エアの排気音が大音量で聞こえてきた。

マミヤが、ソルベが、金髪の魔導少女も上を見る。

警視庁交通機動隊のエア・マシンがゆるやかに下降してくるところだった。

強烈なサーチライトとランディングライトがマシンから地上へ降りそそがれてくる。

機体は全長一〇メートルちょっと。

後部の左右に翼がある。両翼は機体の斜め下方へと伸びており、着陸時にはヘリコプターのランディングギアのように、脚の役目を果たすようになっていいる。

マシンはゆっくりと、機体底面の巨大なふたつの排気口からエア

を吐きだしながら、弾着地帯のすぐそばの路面に着陸してきた。

胴体のハッチが下方へと開く、それが階段のかわりを果たして、キャビンから大人たちがぞろぞろと降りてくる。軍政異端審問局の審問官、警視庁、生活安全部の少年事件課の刑事たち、交通警察の機動隊員らだった。

魔導少女のむかおうとした？今夜のコース？のその先、西銀座方面からは、消防車輛や修復作業車などが何台もつらなり到着してくる。

少女は、異端審問官たちに連行されてエア・マシンにさせられていった。

乗りこむ間際、魔導少女は泣きはらした貌にもかかわらず、マミヤのほうを見てきた。

マミヤを見て、すこし、ほんのすこしだけ、微笑みを見せた。

彼は、ヘルメットを脱いで彼女になんとか応えようとした。

掛ける言葉は、見つからなかった。

彼女はそのまま機体のキャビンへと消えていった。

唯、重苦しい表情で見送るしか術がない。

七月の暑気が押しよせてくる。パンツァーの空調をワンランク上げた。

空を見る、マスメディアの何台ものエア・マシンが空中でホバリングしているのが見える。

機動隊のエア・マシンが離陸、垂直上昇を始め出す。

マミヤは無言で、空に浮かぶマシンどもを見上げていた。

マミヤの中学の日常の風景

マミヤのかよう中学校は、ごく普通の公立校だ。

東京二三区からすこし離れた、南東京市の市立中学校。

未明の？闘い？に動員されたけれど、きょうは平日、学校は休ませちゃくれない。

なんてったって一五年次生 中学三年 義務教育の真つ盛り
ってヤツだからだ。

眠たい目をこすり、遅刻ぎりぎりで一五年二組のドアを開ける。

二〇人ちよつとのクラスメイトたち、階段状の教室、ドアの左手が最上段の席、右には教壇と大型ディスプレイがあった。

数人の同級生たちがかけよってくる。

みんなが口々にいってくる、おいマミヤ、深夜の動員オットメご苦労さん
っ、とか、ネットでニュース見たぞっ、？インター杯？残念だった
なっ、とかなんとか、そんな感じにいろいろ騒々しい。

教室最上段を見る、ソルベを中心にして、クラスのいちばん目立つ男女が集まっている。

例によって、ソルベの未明の？インター杯？その武勇伝の吹聴会
が盛大に開かれていた。

背の高いソルベはひときわ目立っている。

横目で見ながら、中段ぐらいの席、窓際の自分の席に座った。

すると女子の集団からひとりがマミヤのほうへ駆けよってきた。

となりの自分の席に音を立てて座りこむ。マミヤはだらしなくデスクに突っ伏した。

元気印のポーター、けっこうカワイい、愛嬌のある顔立ち。

小学校からこつち、ずつとなぜかおなじクラスで顔をつきあわせ
てきた。

「なんだよオナホ？」

「ばーかっ、ナホさまと呼びなっ、それ、ホントマジウザい、百万

「回くらい聞いたからっ」

名前を茶化された反撃に、ナホが打って出てくる。いつもの挨拶のようなものだ。

「ねえ、あのさ、深夜の？インター杯？……残念だったね」

口調にはいたわりがあつた。仕事をリストラされる運命の彼氏に対する、彼女のような。

「それ、やめてくれ、高校のインターハイじゃあるまいし、嫌いなんだよその略し方」

「だってさ、誰も？インターセブション・カップ魔導少女迎撃競技杯？なんて長つたらしいの、呼ぶわけないでしょ」

ナホは大胆に耳元に顔をよせてきて、

「グレード？（G・？）のインター杯ですら、勝てないってマミヤどうしちゃったの？？ついたら小物の魔導少女ばっかしか出てこないじゃない？」

「だからソルベ中尉殿に譲ってやったのさ、？小物の獲物？をね」

「っ……あんた分かっていってんの？一四連敗だよ？カド番？なんだよっ」

「だからどうしたんだ？」

「つぎのレースで負けたら獵騎兵クビになっちゃうじゃないっ、あんな小物相手につ、昔の勢いはどこへいっちゃったのよ？」

唐突に、未明、あの魔導少女の涙が脳裡をよぎっていった。

小物の獲物？ ちがう、ひとりの少女だ、獲物なんかじゃない、人間の女の子なんだ。

あの子は屈辱に耐えていた。パンツァーを剥がされ、きれいな背中を、腰を、その下も見せ始めて

。そこで眼を背けた、直視できずに。これが己の仕事であるにもかかわらず。

でも？ ほんとうは、見たかったんじゃないのか？

あのソルベと自分、おんなじ人間のオスじゃないのか？

いくら打ち消しても疑問は消えてくれない、なあ？ ホントは

。

「なに、どうしたのママヤ」

ナホが肩に手を掛けてくる。ママヤはデスクに顔をうずめたまま、

「……自己嫌悪」

つぶやいた。

と、そこへナホが、

「あー、やだっ、きなすったぜ、ソルベ中尉様々がっ」

「マジ？」

ふて寝してごまかすことに決めた。

「よう、万年連敗曹長殿っ寝覚めはよかったか？ もう慣れっこだろ、負けんのにっ」

数人の取りまき連中が笑いこぼれた。

ナホはソルベに挑む視線で、

「ママヤ曹長はアンタに獲物を譲ってやったんだってさっ、小物だったからよっ」

不吉な沈黙がおりた。

取りまきのひとりが怒り出して、ナホと言い争いを始めた。ソルベが片手をあげて、

「やめろ」

ソルベの一言、場がおさまった。

「こっちはやってやるわよっ、インターセプター異端審問獵騎兵の中尉様だからってイバンじゃねーよっ、あたしらとおんなじ一五年次のクセにっ」

「なあナホ、お前の彼氏の」

「バカッ、こいつはっ、ヤダ、彼氏なんかじゃないわよっ」

「まだ、ママヤ、とはひと言もいってないけどね」

「っ」

「まあいい、じゃあお前のペットのママヤくん、インター杯何勝何敗か知っているのかい」

「ど、どうだっていいじゃないっ」

「よくはないさ、魔導少女の魔力は撲滅されなければいけないんだ、社会の秩序の為にな、そのために僕たち審問獵騎兵が体を張ってる、僕はいずれG?に打って出るよ、あのエースのシゲミツ中佐と肩を並べるまでになってみせる、絶対にね」

「シゲミツさんに？ アンタがあ？ アタマ湧いたんじゃないのっ？」

「すくなくとも、その負け犬よりは可能性があるよ」

「ママヤだつてがんばってるわよっ」

「二勝一四敗のどこが？ カド番?のどこががんばってるってんだよっ」

ママヤは横目でちらり、周囲を見る。

上背のあるソルベにむかって、ナホは決然と相對していた。

ナホは怒っている、本気で青筋を立てて怒りまくっていた。

「ごめん、ソルベ、俺、もうすぐクビだから」

鬱陶しい、自分にはナホにかばってもらう価値なんかはない、そう思うからテキトウに謝った。

「ちょっ、ママヤーツなんかいいかえしなさいよっ、すこしぐらいっ」

「傑作だなっ、女の腐った奴はそうやって他人に頭下げつつける人生ってわけだっ」

ソルベはひとしきり、取りまきたちと笑いあってから、ナホに、

「なあ？ こんな負け犬の相手はやめてさ、僕のグループに入れよ、僕ってば、また年俵が上がっちゃってさあ、こんなに？ ってくらないんだぜ？ なんせ僕はG?、G?あわせて一八勝無敗だからさ」

「ひっぱたいた、ナホが一八勝無敗の異端審問獵騎兵中尉様の横っ面を盛大にひっぱたいた。」

クラスの中で集まり出した。ナホやめなよー、とナホの友達連中がいつてくる、おいケンカやめろー、と中立派のグループの男女たちも大声をあげ出した。

そこへ初老のクラス担任がようやく入室してきた。皆、自分の席に着き始める。

ソルベはナホをじっとり、凝視しながら、

「……このままじゃ済まさないぞ、いいか、絶対にだからな」

「アンタなんかそのうち負けてみなさい、自称エリートクンほど負けると脆いモンよっ」

「……」

ソルベはナホを見て、マミヤを睨み下ろし、ついで教壇の担任に一瞥をくれた。

無言で立ち去っていった。

取りまきたちが中指を下品に突っ立ててくる。しっしっ、とナホが掌をふって追いかえす仕草をする。彼女がどっかと席にまた座りこんだ。

「ナホ」

「……」

「なんでおまえが泣く？」

「ばーか、このあたしが泣くわけじゃないっ」

マミヤはまたデスクに突っ伏して、

「……ごめんな」

ナホがこつちをむく、その気配を感じる。

「だからっ、なんで……そんなすぐ謝んのよっ」

涙声でささやいた。

はい、みなさんおはようございます、初老の担任が朝の挨拶をしてくる。

クラス全員が起立する。

「はい座ってよろしい、ええと……きょうのー限目は、あー、倫理学ですね」

担任は連絡事項を伝えて、ホームルームをとつと切り上げ教室をあとにした。

全員が座った。あー、かったりーよねー、倫理の授業っ、皆、そ

う口々に騒ぎ出す。

マミヤは横目で彼女を見た。

ナホはうつむき、しきりにポニーテールに手をやって、髪をいじっていた。

表情は、見えなかった。

平穏な授業の破られた日

一 限目、倫理学の授業。

かったるい内容をさらに酷いものにしてるのが講師のやる気の無さだった。

「えーまあこのようにね、」

現代の生命科学をもっとしても、なぜ魔導少女が一定の割合で誕生しつづけるのか？

なぜ第二次性徴期を過ぎた少女の体表面に、悪魔の紋章と呼ばれている痣が生じて魔導少女として覚醒するのか？

依然真相は不明だけど、おおくの仮説の立てられるなかで最有力なのは、恋愛感情が覚醒や魔導力と密接に関わっているとゆう

ー

倫理学の時間、解説をつづける二〇代のスマートなおバサン、いやいや、お姉さんが教壇に立っている。

一〇代のころはさぞかし美少女として遊んだんだろう、そんな派手なファッションに身を包んでいた。

彼女の正体は、法務省の内局である人権護民局の護民官だった。

講師としてときどき市内の中学をまわっているのだ。

ちなみについたあだ名はゴミンゴちゃんという。

マミヤは憂鬱な気持ちで窓の外を眺めていた。初夏の陽差しは眩しかった。

手首の震動に気づいた。右手に巻いた手首専用のタッチパネル情報端末、リスト・タブレット、通称リストタブのバイブレータ機能が働いて、震動したのだった。

メール受信を告げている。

メールは転送されまくっていた。発信者はこのクラスの中立派グループの女子である。

《日本魔導少女自立支援協会（JMA）の最終オッズ情報だよー

ーっ》

バカらしい、そう思い、メールを削除しようとした。
となり、ナホがおんなじメールに見入っている。

なんとなく、マミヤもつづきを読んでみることにした。

《今日深夜三時のG？、一対二戦インター杯最終オッズ、
ワンオンツー

ソルベ中尉単勝一・二三倍、

それにくらべてマミヤ曹長のオッズは二七・六四倍ーーっ、
これじゃ賭けにならないよねーーっ、

やっぱりうちのクラスの出世頭はソルベ君に決まりかもねっ、危
うしカド番曹長っ》

ナホがじつと、見入っている。

すると彼女は、自分のリスタブでメールを打ち始めた。

来た、受信、またバイブレータが作動した。ナホからのメールだ。
開いてみる。

《負けないで》

ただ、この一行。たった、これだけ。

マミヤは自分のリスタブにかぶデジタルの文字を追った、画面
にじつと見入ってタッチパネルにかぶ文字に指で触れてみた。

『と、いうわけでね、』

魔導少女をそそのかし、その破壊力を悪用した魔導テロが世界中
で頻発するに至り、我が国におきましても、

やむなく時の政府は、国会を解散、一時閉鎖の超法規的措置を執
りつつ、

軍政があくまで臨時措置として四〇年前から施行されるにいたっ
たわけでございます、

やむなくも少女たちの健全な育成、人権擁護、情緒不安定になり

がちな彼女たち魔導少女の魔導エネルギー発散のため、

ひいては完全にエネルギーを消失させるためにね、

インターセリシオン・カップ
魔導少女迎撃競技杯がですね、

ほんとうにやむなく開催されるようになったわけでありまして、

あ、

……テキスト読むの疲れたわ、

教壇の上のゴミンゴちゃんは、まったくやる気のない声音でテキストを棒読みしていた。

それにつけても、この美女、やる気モードOFFっちゃってる感じがものすごい。

マミヤは横目でナホを盗み見た。

彼女は、ぷいっ、と右に顔をむけて表情をかくす。

ポニーテールを可愛く揺らしながら。

「そのための組織として法務省の所管の下、人権をですね、あくまで人権擁護の立場を固持しつつ、

独立行政法人であるところの、日本魔導少女自立支援協会（JMA）が発足したわけでございましてですね、

インター杯の収益金アガリは、法務省の貴重な利権、協会は大事な天下り先になってるのよね

……あ、余計なこと言ったわ」

誰も聞いちゃいなかった。

マミヤもそうだった。考えた挙げ句にメールの返事を打ち返した。

《ごめん、ありがとう》

送信する。

となりの少女は文面に見入っていた。突然。

「ばーか」

唇の触れるくらい、マミヤに近づき、耳元でささやいてきた。

彼女の吐息、右の半身が熱くなる、熱を帯びる。

彼女の唇が、吐息が、貌が離れていった。

彼女はまた自然な姿勢をとりもどして、何事もなかったかのように教壇のディスプレイに目をやっている。

「ばーか、耳について、離れない言葉。」

少女が、こっつん、と左足でかわいくキックをしてくる。

マミヤは、そうつ、と肘で少女の腰の脇を突つついた。

少女がこっちをむく、微笑んでいた、もう泣いてはおらず、微笑んでくれていた。

マミヤは戸惑った、どうしていいのかわからなかった。

初夏の陽気、教室のエアコンがなぜか、ちつとも効いてはいないように思えてくる。

「ええとね、」

彼女たち魔導少女に対抗、迎撃すべく、軍政異端審問局はね、

人工の魔導少年とも呼ぶべき少年たちの育成を開始いたしました、このクラスにもお二方、在籍されていらつしやいますね？

「うら若き異端審問猟騎兵さんですねっ、猟騎兵さ〜んっ」

ゴミンゴが突然、黄色い声を上げてくる。

彼女がソルベをちよつと見て、それからマミヤを見てくる。

手をふつてにこりと微笑んでくる。

最上段、ソルベの席のあたりから、口笛、拍手、喝采がわきおこつてきた。

例によつて取りまき連中だ。

「授業にもどりますよ、」

はい、彼ら少年たちが人工的に魔導エネルギーを發揮するため、魔導石？が發明されました、

發明したのは、魔導工学で最先端の研究を誇るドイツ連邦でございましてですね、」

ナホがマミヤの耳に口を近づけ、

「なーによ、ゴミンゴのヤツ、マミヤに気があるんじゃないのっ」
彼女はふくれっ面だ。

まさか、とマミヤは軽く首をふってつぶやき返した。
マミヤのデスクの上、震動がおきた。

学習用の大型ペンタブレット端末が小刻みにデスクの上を動き出す。

バイブレータの機能なんかじゃない。それは教室全体の震動だった。

そしておおきな校舎の揺れ、爆発音が聞こえてきた。

護民官のお姉さんのやる気のない、けれど饒舌な語り口がやんだ。

さらに、こんどはいつそうおおきな震動。

床が小刻みに揺れる。轟音が聞こえてくる。

下の階のほうからだ。

「ナニこれ地震っ？」

女子の誰かが叫んだ。

それが合図と化して全員が席を立つ。

「はい、落ちついてくださいね、落ちついて行動を」

ゴミンゴが呼びかける。

誰も聞いちゃいない。

クラスは騒然となり始めた。

第三級アーデルハイド暴走事件

クラスが騒然となる。

そこへ校内放送を告げるチャイムが鳴り響いてきた。

『ええ、緊急放送です、これは訓練ではありません、みなさん慌てないでください』

校長のアナウンス、本人の声は狼狽しきっていた。

全館に放送の流れるのが聞こえてくる。

『ええとですね、一三年四組、女子生徒がですね魔導少女として覚醒の様、

とり乱した状態ですね、重力場を放出中、

？第三級魔導力場展開暴走？の様です。

一階校舎の被害甚大、速やかに普段の避難訓練同様、避難の開始をですね 』

ゴミンゴが真っ先に教室から飛びだしていく。

急ぎ、現場にかけつけるつもりなのか、このお姉さん、

やれ人権擁護だのなんだのって、どうやら口先だけではなかったらしい。

ママヤが立つ。

ゴミンゴのあとを追うように、教室内の階段を跳ぶようにして降りてゆく。

「ママヤッ」

ナホの悲鳴に、ふりかえって、

「おまえは訓練どおり非常階段から地上へ逃げろっ」

ナホに叫び返す、ついでソルベを見上げて、

「なにしてるっ現場にいくぞ中尉っ、護民官殿に後れをとるなっ」

一喝されたソルベは、茫然自失の体からようやく自分をとりもどしたようだ、

大柄な体を素早く動かす、階段を下りてママヤの元にやってくる。

「魔導石は四錠もってる、中尉はっ？」

「僕は五錠だ、第三級暴走なら楽勝だぞ、被害者救出優先でいこう、マミヤ曹長っ」

「わかってるっ」

ふたりの少年が廊下に出る。

先にいったゴミンゴの姿は、無い。

ふたりがうしろをふりむく。

髪を振り乱し、廊下を走り逃げゆくゴミンゴの後ろ姿があった。

「ゴミンゴのヤツッ、ひとり非常口のほうへ逃げやがったっ」

「構うないくぞ中尉っ」

ふたりが制服のブレザーから金属製のピルケースをとりだす。

蓋を開けると、蒼白色に光り輝く魔導石の光が少年たちの顔を照らしだす。

長さは一五ミリくらい、長方形のカプセルのように形状が整えられている。

少年たちが一錠をとり、噛み、砕き、舌下錠の要領で唾液に溶かす、速やかに全身に成分を行き渡らせる。

「来たっ、クソッ、漲ってきたっ」

ソルベが荒い息を吐く。

プライドの塊のような少年だけれど、仮面を脱ぎすてたいま、獯猛な猟犬の本性を見せていた。

マミヤも頬を紅潮させる。

血圧、脈拍、心拍数の急激な上昇と興奮、快楽を押さえこむのに躍起になる。

走るうち、ふたりの両眼が光り出す、蒼白に輝きだしてきた、あのときの、未明のインター杯のときのように。

やがて体の表面、皮膚全体からも、制服の着衣の下から光を放ち始めた。

少女との出逢い

ふたりの少年は、避難する生徒らの波にぶつかからないよう、教職員専用回廊を通って最短コースで現場に駆けつけた。

校舎一階の一三年四組の教室、隕石メテオの落下してきたような惨状を呈している。

破片は外壁を突き破り、外廊下は足の踏み場もない有様だ。現場は無人大。

倒れている者の姿も無い。

何度か目撃してきた、これが？第三級魔導力場展開暴走？の破壊力だった。

ソルベの右手首のリスト・タブレット端末、通称リストタブに軍政異端審問局から緊急指令通信が入った。

相手は大佐だった。

ソルベが大佐と連絡をとりあう。

その姿を見て、やはり痛感させられる、自分は下士官なのだ。

この現場の指揮官は、自分ではない、中尉であるソルベのほうだった。

「了解しました」
アイ・サー

ソルベがこつちを見て、

「学校から審問局に報告がいつてる、死傷者はゼロ、ターゲットは現在一三年五組の教室内に移動した模様、彼女のデータがきた、君に転送する」

「了解中尉」

軍政異端審問局からソルベのリストタブへ、覚醒した魔導少女のデータが送られてきた。

それがマミヤのリストタブに転送されてくる。

マミヤは画面を注視した。

《ターゲットの宗教感情：国家定期健診の心理スキャン情報／一〇

○%無宗教との判定結果アリ・オカルティズムへの関心傾向：アニメ等からの情報に傾倒中／受診から五三日経過》

日本では無宗教のパターンが比較的多い。

特定の信仰があれば、それに感応する専用の呪符を用いてターゲットを拘束できる。

彼女の場合、アニメ、コミックなどサブカルチャーからの雑多な情報の影響を多大に受けていた。

この子を拘束するためには、それに応じた、いかにもそれらしい呪文、術式が有効だ。

それがその子にとっては、最大の心理的效果、打撃となってくれるからだ。

ふたりはブレザーの懐、専用のホルスターから 拳銃用のものではない 呪符を数枚とりだした。

審問局から？それらしい術式・呪文？がダウンロードされてくる。最初に呪符にインストールされてきたのは、清明桔梗印、いわゆる五芒星だ。

それに？臨兵闘者皆陳烈在前？の文字。これは修験者の呪法？九字？の真言である。

五組、この廊下をさらに奥へといったすぐ先にある。

ふたりは魔導パワーの跳躍力を使い、身軽に廊下の残骸の上を跳びこえていった。

五組のドアにたどりつく、ふたりが目でうなずきあい、ドアを開ける。

教室の中、女子がいた、ふたりいた。

ほかに生徒も教師も、避難して誰もいない、ふたりの女子だけだった。

教壇の手前、階段状の教室の最前列、全身から蒼白色の不安定な発光をくりかえし、泣いている少女がいる。

そしてもうひとり、その魔導少女を抱きしめている女子のうしろ姿が見えた。

ソルベが臆した様子で、つばを飲みこんだ。

「中尉、拘束呪符を」

マミヤは携帯用ヒートナイフをとりだした。

ナイフを人さし指の先に照射、血を数滴、呪符に垂らす。

呪符にインストールされた清明桔梗印と九字が蒼白色に光り出す。

「中尉、早く呪符をつ」

「あつ」

ソルベも我に返った様子でマミヤとおなじ行動を始めた。

ふたりの若き異端審問獵騎兵は、間合いを詰めていった。

覚醒してしまった女子生徒は、怯えた様子でふたりの少年に貌をむけてきた。

小麦色に日に焼けた、可憐な少女だった。

「つ」

少女がなにかを言いかげようとする。

マミヤが、覚醒した少女の肩に一枚、拘束系呪符を左手で押しつける。

九字を唱える。

「臨、兵、闘、者、皆、陳、烈、在、前」

右手を動かす。

人さし指と中指を伸ばして？刀印？を組む。早九字と呼ばれる呪法を執行した。

びくんっ、と少女の日焼けした体に震えが走る。

ソルベも遅れて呪符を貼る。緊張した面持ちで早九字を執行する。

呪符の九字が、ふわり、札から離れ、空中に躍り出る。

蒼く輝く縄のような形状となって、女子の体に巻き付き始めた。

「……あ、マミ……っ……」

覚醒した子は、ぽつり、と一言だけ声を発した。それからゆつくりと気を喪っていった。

拘束、完了。

ソルベが、ふっつ、と脱力しながらも、すぐに大佐に報告を入れ

る。

ママヤが、抱きしめていたほうの女子を見て、

「軍政異端審問局の者です、異端審問法に基づき、第三級アーデルハイド暴走の容疑者を緊急拘束しました、あなたにお怪我はありませんか？」

その少女はすこしばかり首を横にふった。

「御無事でなによりでした、失礼ですが事情聴取にご協力を
言葉は、固まった。」

女子ががふりかえったのだ、覚醒した魔導少女を抱きしめたまま、黒い、さらさらのロングヘア、黒と茶色の宝石を凝縮したような両の瞳、泣いていた、その瞳から涙が溢れ、こぼれ落ちていた。

少女は、ツン、と上をむいた小生意気そうな整った鼻梁、その下の艶のあるピンク色の唇から一筋血を流している。

黒髪、輝く両の瞳、こぼれた涙、白い肌に流れる赤い鮮血。

それが、魔導の蒼白色を間近に浴びて、光と影、濃い陰影を醸し出していた。

ママヤは、任務を忘れ、少女に見惚れていた。なにもできず、立ちつくしていた。

「この子ならもうだいじょうぶよ」

少女の、凜、とした涼しげな力強い声音。

「……あ、はい、貴女のお怪我は……」

なんとか、それだけ口にできた。

「私なら平気、この子にちよつとぶたれただけ
くすり、と寂しげに微笑んだ。」

「あの、それは、なら保健室にきていただきます、応急処置を施し、その……さらなる治療の必要なときは、医療費は異端審問局に請求してください、全額を軍政府がお支払いします」

少女はそつと、頭を下げた、礼の印に頭を下げた。

うしろからソルベが、

「曹長つ、大佐の命令だ、僕がターゲットを審問局へ護送する、悪

いな、僕の手柄という形になってしまいが、君はその少女から事情聴取をして、報告を」

ソルベの言葉が途切れた。

こちらをふりかえった少女の貌を見たのだ。

ぼけっ、としてマミヤ同様、その場に固まってしまった。見惚れてしまっている。

少女が、拘束された魔導少女の体を静かに床へと寝かしてやる。

自分のブレザーを掛けてやった。

マミヤが、

「では、中尉、護送を頼みます」

ソルベはうわの空だった、地球と月のあいだを一往復するくらいの時間、微動だにせずについて、それからようやく我に返ってきたようだった、月面の宇宙ステーションから帰還して、生まれて初めて生身の美少女と出逢った、そんな顔をしている。

「あ、いや曹長、僕が……君にかわって事情聴取を」

「大佐の命令で、手柄を得るんじゃないのか、中尉？」

ソルベが顔面を引きつらせて、最大級の悔しさを表現してきた。

少女の名は、エリカ

保健室で、その少女は養護教諭から怪我の手当を受けた。

教諭は、事情聴取のことをわかっていたので、処置後席を外してくれた。

静かな保健室。

ふたりつきりになった。

少女は、椅子に座り、窓の外の景色を見ていた。

なにかの決意、意志をしっかりと秘めたような瞳、居ずまい、そんな雰囲気は少女には備わっているように思える。

マミヤは立ったまま、気圧されていた。相手は一三年次生だぞ？ 自身、いきかせてから右手首のリスタブの録音モードを起動する。

「これより自分が、異端審問猟騎兵マミヤ曹長が事情聴取を開始します、自分のリスト・タブレットに音声記録されますがよろしいですか」

「構いません」

「まず、お名前を」

「エリカ」

視線は、窓の外をむいたまんまだった。

「……なぜ、貴女は現場で魔導少女を抱きしめて」

「私の転校してきて初めて出来た友達だったから、だからいっしょうけんめい、暴れるあの子を抱いていたの、異端審問法に触れますか？」

「い、いや、そんなことはありません」

「では、これで帰っていいですか？」

マミヤは、いったん録音を中止した。

つばを飲みこもうとして、気づいた、口の中はからからに乾いていた。

「あの、なにか俺はっ……自分はきみの気に障ることをしましたか」
少女は、初めてマミヤに視線を合わせてきた。

「気づかないの、異端審問官さん？」

「いえ、猟騎兵ですが……自分に落ち度があったなら」

「きょう、私の大切な、できたばかりの友達が魔導少女になった、あなた方はその子を縛り上げてから、その子のこと、まるでその場にいなくなったかのように私をじっと見てきた、あなたも、それからさっきの中尉さんも」

マミヤは両眼を閉じた。返す言葉、どうしようもない、なにも見つかからない。

「女の子を口説こうとするんなら、時と場所を選んだほうがいいわ、それとも異端審問官さんにとって、魔導少女になった子は女の子の人数のうちに入らなくなるの？」

「申し訳なかった、謝罪します」

「要らないわよ、謝罪なんて」

少女は、エリカは席を立った。

「噂どおり審問官って最っ低ね」

軍政異端審問局オフィスの喧騒

エリカ……エリカ・ヴァンデル・メーア。
帰国子女。

先週、ドイツ連邦共和国から日本に帰ってきたばかりだった。

現住所は南東京市、実家は飲食業、兼旅館業。

屋号は？ユリスモールカフェ？……都知事への届け出書類を見た限り、規模などから簡素な宿泊施設の類だろうか、そう思われた。

年齢、まだ、十二歳……大人びた子だった。

振りまわされてしまった。悔しい。

そうだ、これは悔しさ、なんだ。

マミヤは、デスク上のタブレット端末のタッチパネルを叩きつづけた。
なにかに憑かれたかのように。

けれどこれ以上の詳細な個人情報はない。

法務省の内局、人権護民局によって個人情報の開示はあくまで厳しく限定されている。

異端審問猟騎兵といえども、すべての情報を思うがままにかき集められるわけでは無いのだ。

ふっ、とため息をついて、今朝の覚醒したばかりの魔導少女、エリカに抱きとめられていたあの少女の容態をたしかめるべく、外線を発信した。

相手は少女の収容先の警察病院だった。

端末ディスプレイにまだ若い女性看護師が映った。

『あら、マミヤ曹長、また今朝の子の件でしょうか？』

「はい、容態は安定しているでしょうか」

『だいじょうぶですよ、バイタルはすべて正常です。』

きょう、もう八回も確認してくるなんて……さては学校で、一目惚れでもした相手でしたか？』

女性看護師が笑顔になる。

そのうしろ、ナースステーションのほかの女性看護師たちも笑顔を見せる。

マミヤの表情をうかがおうとしてか、画面をのぞき見てくる。

「いえっ、決してそんなことは……仮にも審問猟騎兵です、魔導少女を相手に、その……」

自分でも赤面していくのがわかる、一目惚れ、この言葉に反応してしまったのだ。

『まっ、ごめんなさいね、私ったら……その、冗談のつもりでした』
女性看護師は本格的に誤解した様子だった。

マミヤは顔を赤くしたまま、看護師たちは驚き、好奇心、困惑を様々に見せながら、お互いに謝罪し合う、なんだか訳のわからないビデオ通話になってしまった。

外線を切った。

東京都内、霞ヶ関の法務省の外局、軍政異端審問局庁舎内、五階
時刻は二二二五時^{ふたふたいちご}。

もう、午後一〇時過ぎだというのに、庁舎内には残業組ライン職の官僚たちの周囲にスタッフ職が集まっている。

五階フロアでは指示と罵声、口論の応酬が飛びかっていた。

睡眠障害覚醒薬の入ったブラックコーヒーをひと口飲んだ。

ぬるくなったブラック、飲めたもんじゃない。

マグカップを自分の専用デスクにおきなおし、デスクチェアの背もたれに全身をあずける。

何を、何をいったいどうしてこんなにエリカのことを焦って調べているんだ？

あの覚醒した少女のこと、何度も容態を確認すれば、許してもらえる、エリカに合わせる顔ができる、そうとも思っていたんだろ
うか。

もうひと口、コーヒーを我慢して飲んだところで内線が鳴った。

タブレット端末、着信音だ。

相手は六階にいるソルベ中尉だった。

あまりいまの気分では、というか、まったくといっていいほど相手をしたくなかったけれど、

「なんでしよう、ソルベ中尉」

内線を開く。

ソルベのふてぶてしい笑みがモニタに映った。

『もう定刻を過ぎてるし、敬語はいらないよママミヤ？』

「……用件は？ ソルベ」

『エリカ・ヴァンデル・メーア……調べていたな？ あの子の個人情報？』

眼をつぶって、

「察しが良いな、いつもながら……俺の情報開示請求履歴、見たんだろ？」

『なあ、お互い考えてることはいっしょじゃないか』

「なんのことかな」

『おとぼけは無しにしよう、君には愛しいナホがいるだろ？ あの

ふざけた暴力女がねっ』

「ナホを悪くいうな」

『僕は正式に学校事務局に、エリカとの異性間交遊申請をするつもりだ』

「……」

『ハハッ、凶星かつ、凶星だろうっ』

ソルベが含んだ笑みをこぼしてきた。

「いいことを教えてやる中尉殿」

『なんだい？』

ママミヤはありのまま、きょう保健室でのやりとりをソルベに話してやった。

ソルベは最初、自信満々の笑みをうかべていた。

そいつが話を聞き終わるころには、月へのシャトルバスに搭乗したとき、自分の宇宙服を家におきわすれてきたことにやっと気づい

た一〇年次生のような顔になっていた。

完全に余裕の消し飛んだ声で、

『不味い、不味いだろっ完全嫌われたぞっ……君はどう思う？
どうするつもりだいっ？』

「あした学校が終わったらすぐに家に訪問して謝罪を」

『遅いつ、君はいつも遅いつ、だからインター杯であんな成績をとるんだっ』

「じゃあどうする？」

『いまから実家についてみるさ、飲食業の届け出見たろっ？』

「……ああ」

？ユリスモールカフェ？……カフェの閉店時間は、〇四〇〇（まるよんまるまる）時と申告されてあった。

すくなくともカフェは深夜未明まで営業をしている。

エリカが店にいるかどうか、まだ寝ていないかどうか、それはなんの保証もなかったけれど。

？睡眠圧縮剤？がひろく普及して、市民の睡眠時間が平均二丁三時間ぐらいが常識とはなっていた。

昔で例えれば、夜の七時過ぎに下級生の実家のカフェに遊びに行く感覚に近い。

ママヤとソルベは各々、残務を処理してから怒声の飛びかうオフイスをあとにした。

？魔導の姫？〜欧州リーグの覇者？

更衣室で猟騎兵の内勤用常装軍服から私服に着替えをすませる。
軍政異端審問局、庁舎屋上。

エアポートにふたりが顔を見せあつたのは、ちょうど日付のかわる頃合いだった。

ふたりは、帰宅する職員たちの行列にならんだ。

民間のタクシー会社のエアマシンが一〇台以上も屋上に集結している。

職員たちのために駐機しているのだった。

飛び立つマシンの二本の脚部、強烈なランディングライトが輝き乱舞していった。

屋上は、真昼のように明るかった。

航空機誘導員がつぎのフライトに立つエアマシンを誘導してくる。
マシーナラー
ママヤたちが乗りこむ。六人乗りの小型のエアマシンだ。

ふたりを乗せて離陸していった。

ママヤは、眼下にひろがる東京の街並みを見下ろす。

街の灯りのけばけばしい、渋谷、新宿、池袋、赤坂、六本木……。

その周辺、ゲートッドコミュニティと呼ばれる、半ば要塞化した防犯外壁に囲まれた高級住宅街、

億の値のつく超高層マンション群。

それと対照的に、灯りのろくすっぱ見あたらないうスラム街があちらこちらに散見された。

灯りの街と、昏い街、そのまだら模様。

まだらをつなぐ線、都心の高速道路や主要国道は、打ち棄てられた電気自動車が、暴徒化した住民やギャングの手によって放火され、無数の燃える点となって、煙を夜空に上げていた。

空に目を転じれば、富裕層と中流層の人々を乗せたエアマシンが闇夜のおちこちにランディングライトを点灯させて、夜間のフライ

トを我が物顔で満喫している。

「なあマミヤ、この景色を見るたび、僕は優越感に浸るんだ」

左に座るソルベが、ぼつり、いつもとちがった、どうにも疲れた口調で語りかけてくる。

「……」

「ごらんの有様、いまのご時世、民間にろくな仕事なんて見つかりやしないよ、去年の、一四年次生死事件、憶えてるか」

「……金持ちの母親が、十四歳の息子に質の悪い魔導石を飲ませて、拒絶反応で死なせた、あの案件だろ」

「ああそうさ、世の中こんな案件ばかりだ、何千万も払って闇市場で粗悪な魔導石買い漁って、子供に飲ませたところで、？魔導石適性？を保持する少年は一〇代人口のたった〇・一％だったのにな……親つてのは……自分の子供にバカな期待を持ちすぎるんだよ」

マミヤは心底うんざりして、

「なにがいいたい？」

「ハタチを過ぎても魔導石適性を保持できる確率、〇・〇〇一％未満……だから僕は残り最後の五年間、有意義に過ごす、そう決めたんだ、

ハタチまでに出世して、財産を蓄え……異端審問獵騎兵を分限免職になったら、審問官試験にパスして昇進したい」

「エリートは、いうことがうな」

ソルベが初めて、窓から視線を引っぺがしてこちらを見てきた。

「なぜだいマミヤ？ なぜG？のデビュー戦と第二戦、あれだけ華々しく連勝した君が、どうして一四連敗なんて無様な……カド番なんぞに陥ってしまったんだい？」

「さあね、無能だったんだろ」

ソルベは、納得できない、そう小声でつぶやいてくる。

「僕は……僕は勝利しつづけるんだ、絶対にだ、僕になら……できるはずなんだ」

「立派な宣言だな、でもならどうしてそんなに声が疲れているんだ

「？」

ソルベは眼をつぶり、問いには答えようとはしなかった。

前に座る中年のパイロットがこちらを見てくる、気さくな声で、「お若いのに、達観してるっていうかねえ、猟騎兵さんは語る話題もそこらの子とはちがうもんですねえ」

「そうだよおじさん、僕らは選ばれた存在だからね」

ソルベがあしらうように生返事をする。

ママヤが横を向いて、またクソ面白くもない夜の退廃しきった首都をぼんやり見つめ出す。

「まあねえ、わかりますよ、今夜はねえ、我が国の猟騎兵さんたちの落ちこむのもね、無理はないでしょう」

ソルベが初めて、興味を示したそぶりです。

「何かあったんですか、事件が、魔導テロでも？」

「ご存じなかったんで？」

ママヤも、窓からパイロットへ目を転じる。

「欧州リーグの覇者、G？のあの魔導少女がいま来日してるでしょうに、？魔導の姫？さまがねえ」

「初耳ですっ」

ソルベが身を乗りだした。

体を固定したハーネスを突っ張らせながら。

「私もね、今夜のニュースで知りましてね、ああ残業しなすってたんでしたっけお二方は？ だからか、今夜緊急のG？インター杯、開催されたんですよ、五号池袋線でねえ」

ふたりの少年は絶句した。

局のオフィスのあの喧騒、怒りの声……これが理由だったのか。「相手は、あの姫の相手は誰です？」

ママヤが訊ねる。

「シゲミツ中佐ですよ、我が国の猟騎兵のあのエースライダーの……」

… 一対一の一騎打ちですよ、熱く燃えたんですがねえ、

勝負前は、の話ですけどねえ……最終オッズは姫が一・二九倍、

シゲミツ中佐は二・八五倍でしたが、それがねえ……」
過去形。

少年たちは、大嫌いな互いの顔を見つめあってしまった。ソルベが呆然として、

「負けたんですか、あのシゲミツさんが？」

パイロットは何度もうなずいて、

「速攻で負けちゃいましてねえ、タイムは一分ちよい、だったかな

あ？ 姫のあの必殺技が炸裂しちゃって、ねえ、あの例の」

ゲシユライ・トラウム
「希望の悲鳴」

マミヤがつぶやいた。声に熱が、こもっていた、かつては持っていた熱が。

“ ユリスモールカフェ ” ～ 魔女のサバトのラブソング ～

マシンのなかで、それ以上姫のことについて誰も語るうとはしなかった。

沈黙がおりる。

ママヤとソルベはそつぽをむいて、窓の外を見ていた。

パイロットも雰囲気を感じたのか、饒舌な口を閉じてしまった。

南東京市のエアポートに到着して、ママヤたちはすぐにエリカの家に向かった。

？ユリスモールカフェ？に。

住所の情報を頼りに街を歩いていく。

この街一帯は、都心から逃げだしてきた、中流よりすこし上、若干富裕層のためのマンションが林立している。

どこか、ヨーロッパの街並みを意識したかのような、石畳の清潔な歩道。

目抜き通りには二〇メートル以上の高さのマロニエの大木が街路樹として等間隔に植林され、並木道になっていた。

初夏の熱がまだ街を支配している。

ここには、暴徒の影も、壊され放棄された自動車の残骸もなかった。

「おかしい、このあたりのハズなんだがな」

ソルベが焦り声でいった。時刻は午前一時過ぎ。

ともかく、エリカはふたりを嫌っているのだ。

交際を申し込むどころの話ではない、謝罪から始まる最悪のスタートといえた。

「やはりこの建物じゃないのか」

ママヤがとあるレンガ造りの建物のまえで立ち止まった。

赤茶色のレンガ造りの外壁、西洋木蔦の一種、イングリシユアイビーが蔓を伸ばして壁面を覆っている。

三階建ての瀟洒なアパートメント、そんな雰囲気だった。カフェの看板どころか、表札も見あたらない。

ふたりはうなずきあい、ドアの脇の呼び鈴を鳴らした。

『どちらさまでしょうか』

インターフォンの少女の声、エリカではなかった。

聞き覚えがある、たしかに、マミヤは思った。

「ソルベと申します、失礼ですがこちらは、エリカさんのご実家のユリスモールカフェではございませんか？」

自分はエリカさんの通う中学の一五年次生です、

エリカさんにお会いしたくうかがった次第ですが」

沈黙。

マミヤがドアの上、小さな透明の球体を見つける。

ぼん、と手の甲でソルベを軽く叩く。

顎をしゃくってやる。ソルベも上を見て、うなずいてきた。

球体は監視カメラだった。

『……………どうぞ』

ドアの鍵が屋内からの操作で開けられた。ふたりが緊張した面持ちで建物に入ると、風防のためのガラスドアが正面に設けられてあった。

エントランスはちいさな風除室となっていた。

内側のドアは押すと開いてくれた。

カフェのホールが目の前にひろがる。

二十人くらいがパーティを開けるくらい、それくらいの広さ、右手に長く奥へと伸びるバーカウンター。

左手には四人掛けのテーブルが三台。ほそながい造りのホールだった。

ふたりの少年の眼は、左手の壁に釘付けになっていた。

歴代の優秀な魔導二輪装甲車輛、その写真が所狭しと飾られてあったからだった。

異端審問猟騎兵の駆るヤクトフロント猟犬も、魔導少女が逃げ切るためのヴァイルトカッスェ山猫も、

両方ともだ。

すごいな、ソルベがめずらしく素直に感嘆を口にする。

ただのカフェじゃないな、マミヤは思った。

カウンターの奥、キッチンから金髪の少女がエプロン姿で顔を見せる。

「君は」

少年たちは息を呑んだ。

きのうの未明、G?のインター杯で迎撃した、あの魔導少女だったのだ。

少女はソルベを無視して、マミヤに無邪気な笑顔を見せてきた。

「マミヤ曹長、ワタシがこいつにホウキをへし折られたとき、目を伏せてくださいましたね？ ご厚意感謝しております」

カウンターのスイングドアからホールに出て、こくん、とちいさな頭を下げてくる。

「……いや、その」

マミヤは言葉に窮してしまふ。

それにくらべてソルベは忌々しげに盛大な舌打ちを鳴らした。

「顔バレしましたので自己紹介します、キャラルと申します、フランス系日本人です、」

「トーキョー都内の中学に通う一四年次生です」

少女が、キャラルが金髪のミディアムヘアをふわり、なびかせながら、はつらつとお辞儀をしてくる。

マミヤにむかってだけ。

自分たちの一個下の少女、キャラル。

エアマシンで連行されるとき、自分に微笑みかけてくれたのは、そういうことだったのか、マミヤは理解した。

そうすると同時に口を開いて、

「この魔導二輪の写真、それから君がいること、ここはひよつとして避難所^{サブ}じゃないのか」

「おっしゃるとおり、このカフェと裏にあるホテルの正体はワタシ

たち魔導少女の避難所です」

魔導少女の避難所、通称サバト。

世間から迫害と差別を受けやすい彼女たち魔導少女が安心して生活、定住するための施設、住処、それがサバトだった。

サバトに関する情報はすべて人権護民局が所掌している。

東京だけでもかなりの数があると噂には聞いていた。

天敵であるはずの猟騎兵たちに、偶然とはいえど捜し当てられたのは皮肉としかいいようがなかった。

「さて帰るとしようか中尉殿」

「なっ、まだエリカにも会ってないのにつ」

「猟騎兵がサバトに接触するのは、

インターセプション・カップでの八百長の嫌疑をかけられるだけだ、

それにシゲミツさんの負けた夜なんだ、

サバトで魔導少女とお話しをする気分じゃないだろう」

「ちよつと待てマミヤ、シ、シゲミツさんのことは……ともかくと
してだな、

異端審問法では別にサバトへの接触が禁止されているわけじゃないぞっ、

僕らには捜査権だつてあるし」

「ゆっくりしていつてください、マミヤさんだけ」

「キャロルといったね、君いちいち突つかかってくるなあっ」

ソルベの言葉に、

「当たり前だ、このドスケベ猟犬め、アンタ、ワタシのおしりをオカズに、

寝るまえ変なことしたんでしょっつ？」

可愛い貌に似合わず、物凄い毒舌だ。

「こっ、ここの娘っ」

ソルベが痛くプライドを傷つけられた様子だった。

「ふたりとも落ちついてくれ」

もういっぺんいってみる、とソルベがいうと、
キャロルもドスケベ犬、ド変態ワンコッ、オトコのプライドもない
政府のペット犬っ、
とまあ容赦ない口喧嘩が始まってしまった。
マミヤがもう一度、仲裁に入ろうとしたとき、

「騒々しいわね」

三人が声のするほうをふりむく。
カフェの奥、裏手のドアが開かれていた。

エリカが、立っていた。

白いネグリジエの上、ナイトガウンを羽織っている。

つややかな黒髪は湯上がりで潤い湿っていた。

それをバスタオルで拭きながらホールを突っ切ってやってくる。
マミヤは顔を赤らめて、そっばをむいてしまう。ソルベは破顔して
近づいていった。

「邪魔、中尉さん」

エリカは右手でソルベを払いのける仕草をしてくる。

「ん、あ、あの　っ」

ソルベは、少女のネグリジエ姿を、白い頸を、開いた胸元をガン
見しながら、後ずさる。

エリカはマミヤの正面に立ちはだかった。

「あらためて自己紹介するわ、エリカ・ヴァンデル・メーアよ、こ
の避難所のオーナーの娘、放課後はキッチンでバイトしてるの」
「どうも」

ぶっきらぼうに返すマミヤに、エリカは、
「貴方、どういうつもり？　あの子の容態八回も警察病院に問いあ
わせたそうじゃない？」

マミヤは彼女を直視できずに　特に胸元、未だ幼いながらも胸

のふくらみが呼吸でゆっくり、息づいているせいで　さらに赤面してしまい、

「……無事かどうか気になって、それだけだ」

「それだけ？　ふうーん……私にその気がないとわかった途端、こんどはあの子をくどく気？」

「そんなつもりは無い」

「そうよね、天下の審問官様だもんね、獲物の魔導少女なんか相手にするわけ無いわよね」

「異端審問獵騎兵だ」

エリカは、マミヤの訂正を無視して、自分の入ってきた裏手のドアをふりむいた。

「　だ、そうよ、チハヤツ、どうする？」

かるやかに呼びかける。全員の注目がドアに集まった。

ひよい、と小柄な少女がドアに隠れながらも、半身をのぞかせる少女の髪の毛、左の長く優雅に伸びたサイドテールが、ふわり、揺れた。

「君は、今朝の覚醒した女子じゃないか」

ソルベが驚きを口にする。キャロルは不安そうに、

「ねえ、まだ寝てないでだいじょうぶなのっ？」

エリカは、くすつ、と微笑んで、

「愛しのマミヤ曹長がきた途端、体のだるさはどっかへ消し飛んじやったそうよ」

キャロルが、ふうふうん、と納得げにニヤリ、とエリカに笑顔を返してくる。

「どういうことだ、彼女、退院できたのか」

マミヤが三人の女子の顔を順繰りに見ながらいった。

「はい、ついさっきこの避難所サバトに引越してきたばかりですっ…

…あ、あのっ、私マミヤ先輩のことっ、私、ずつと、ず、ずつとあの、あつあつあつ、あのっ」

チハヤはちっちゃな体を震わせ、舌つ足らずな口調で渾身の告白

をしてくる。

キャロルがぷつつ、と噴きだして、

「好きだったんだ？ チハヤ？ 覚醒するまえから？」

チハヤが隠れた半身、顔も、足も手も使って精一杯動かし、何度もうなずいた。

「僕は気に入らないな、なんだ？ なんなんだこの展開は、これはいつたい」

「空気野郎は黙ってなさいよ」

またしてもエリカのきつい一言。

「そうだよ、このスケベ犬めっ」

キャロルがピンクのベロを出してくる。

「き、君たち、僕を誰だどっ？ G？G？あわせて一八勝無敗の」

キャロルは大笑いして、

「テメエなんかあの？魔導の姫？様にくらべたらド三流のチョーザ
コ野郎じゃーんっ」

「しっ、失敬なっ、世界のG？の頂点に立つ魔導の姫とだね、

まだG？の僕を比較するのは、卑怯だぞっ。

だがしかしだね、い、いずれは僕もだな、いずれはG？には」

「黙れば？ 妄想は貴方の夢日記にでも書いてなさいよ」

三度、エリカのきつい声。

「僕にくらべたら、このマミヤ曹長はG？のお荷物なんだぞっ、一
四連敗のカド番野郎だっ」

エリカはカウンター席のウインザーチェアを引きよせ、馬乗りに座りこんだ。

両の白い、ひきしまった太ももが、ネグリジエからすこしだけはみ出してくる。

ソルベの目が釘付けになる。

マミヤは天井、あらぬほうへ急いで目線を逃がした。

エリカが背もたれに、けだるげにあごを乗せて、

「なら、勝負する？　ここでオトコの度胸、見せあつのもいいんじゃないの？」

「いいともっ受けて立つっ」

ソルベが鼻息を荒くする。エリカの太ももと膝小僧を見て、さらに小鼻をふくらませる。

「中尉だけせいぜい好きにやっていってくれ、俺は帰る」

マミヤが踵を返しエントランスへとむかう。

エリカがキャロルに、ちらり、目配せする。キャロルが笑んで、

「マミヤ曹長っ、お話があるんでーすっ」

駆けよって、彼の腕を引っつかんだ。

キャロルの胸　けっこうある　思いつきり少年の肘に押しあてられて、くにゃん、と形をかえてくる。

少年は赤面して、体を引き離そうとする。

キャロルが、まあまあ、こっちへ、そういつて、ふたりならんでエントランスの風除用の内扉を開ける。

キャロルが扉を閉めると風除室にふたりっきりになった。マミヤは困惑してしまい、

「なにをするんだ？」

「マミヤ曹長、みんな魔導少女を代表してお礼をいいます、

一四戦連続でわざと負けてくれていきますよね、つき負けたらカド番だっつてゆづのに」

「……」

「隠しても無駄っ、闘えばわかりますっ、ワタシはみんなから先に聞いていたけど、

きのう闘って確信しました、シートカウル魔導機関を傷つけずに後部装甲板だけに被弾させるなんてっ、スゴいです」

「……買いかぶりだ」

「ホウキをへし折るの、嫌だからでしょ？　だから負けてくれてるんですよね？」

みんながそう噂をしあっています、

きょうぐらいあのバカ犬中尉と闘って、本気見せてくださいっ」

「俺にはなんのメリットもない」

「勝負してくんないなら報道機関プレスにリークしちゃおっかなー、

異端審問猟騎兵マミヤ曹長は一四戦連続で故意に敗退してるって、八百長疑惑？ そんなんに発展したらキャラルは嫌だなー」

キャラルが、ヤダなー、ヤダなー、といいつつ、

密着してきて またしても胸が、ふにゃんといいい感じになって
しなだれかかってくる。

「……」

マミヤは額の汗を拭きながら、わかった、わかったから離れて、
とすこし声を荒げた。

キャラルが内扉を開けてうれしげに、

「マミヤ曹長が勝負を受けて立つってーっ」

マミヤの腕を引きながら、ホールに踊りこんできた。

引くに引けない勝負〜夏の夜更けのラプソディ、第二幕〜

エリカがうつすら、笑みをつくり　カフェの古風なシェードランプの灯火に、見事に映える笑みで　すらり、身を翻し、バスタオルをチハヤにむかつて放り投げる。

チハヤがサイドテールを揺らし、慌てて受けとる。
それを見てから、エリカはキッチンへと入っていった。

出てくると、両手にもっている肉切りナイフを二本、高々と掲げて見せた。

形状記憶型のサンダルを脱ぎすて、カウンターに乗りあげ仁王立ちになる。

膝の隠れるくらいのネグリジエの裾、太もものシルエツトが、くつきり、天井のシェードランプの灯りで透けて見えた。

ママヤがやはり恥ずかしさのあまり、視線を逸らす。

ソルベは絡みつく視線を向けた。

エリカは両手に一本ずつ、切っ先を下にしてナイフをもった。

全長三〇センチほど、おおきな肉切りナイフだった。

「ふたりともチェアに座ってくれない？　両手は下に降ろしたままね」

ふたりはいわれるがまま、ウインザーチェアに座りこんだ。

カウンターの横で互いを睨みあう恰好に座らされる。

頭をちよつと下げて、カウンターをのぞきこめば、

エリカの履いてるシューズがもろに見えてしまいそうな、見えなそうな、そんな角度。

キャロルがママヤに近づいて、彼の左横にしゃがんだ。

チハヤが、そろそろつ、と歩いてきて、ソルベの右横で正座した。
「いい、みんな？　これからナイフを貴方方の正面の床に落とすか

ら、

見事に柄をつかみ取ったオトコが勝者よ、

手は片手のみ使うこと、私の合図とともに手を出すこと、
それまでは下に降ろしておくこと、いいわね？

キャロルとチハヤが貴方方の監視役をするからフライングしたヤツは失格よ」

ソルベが、エリカのふくらはぎ、太もものシルエット、かわいらしくふくらんだ両の胸、

それから彼女のツン、とすました表情、最後に二本のぎらつく肉切りナイフを見上げた。

「僕が勝つたら賞品はなんだい？」

「私のいま履いてるショートツを見せてあげるわ、ご不満？」

「僕はっ、い、異存ないぞっ」

マミヤに顔を転じて、

「君はどうなんだっ」

「……構わないが」

キャロルが横から、くすくすっ、としながら、

「ねえマミヤ、顔つき、ガラツと変わったー」

「からかわないでくれ」

「僕は負けないぞ、なあエリカ、もしもふたりとも成功するか、失敗したときはっ？」

「そのときは引き分けね、残念賞なら……そうね、あしたにでもなんか考えておくわ」

「よっ、よし、いつでもこいつ」

ソルベがナイフをじっと睨み上げる。

マミヤはそんなソルベを冷静に眺めていた。

「じゃあ、いくわよ」

ふたりの少年、同時にうなずく。

キャロル、チハヤの両の瞳が輝きを帯び始める、あの、蒼白の魔

導エネルギーの光を帯びる。

少年たちの手の動きを見逃さないために。

魔導力の宿る瞳で　そう、それはどんな地上の野生動物をも凌駕する視力を誇っている　瞳で熱い視線を注いでくる。

エリカが、じっと、見下ろしてくる。

その瞬間を図る、一匹の野生のメスの獣のように。

カフェは、静まりかえり

エリカの両の指が開く。

ナイフが落ちる。

少年たちの手が空を切る。

トンッ

小気味のよい音がして、ナイフは……ナイフが

床のフローリングに突き刺さっていた。

二本だ、二本とも、刺さっていた。

ソルベは伸ばした右腕を、怯えた様子で震わせていた。

マミヤは、そんなソルベの様子をやっぱり、無表情に見つめているまんまだった。

ソルベが憤慨して立ちあがり、

「どうやら引き分けだね、ほ、僕はこれで失礼するっ」

「バイバイ政府の御用犬ーっ」

キャロルの毒舌を背中にも浴びながら、ソルベはエントランスを抜け、外へ駆けだしていった。

キャロルが、にひひー、と笑って、

「はい、勝者はマミヤ曹長でしたあー」

「詳細を教えてよ、ふたりとも」

エリカがカウンターの从上からホールの床に飛び降りてくる。
ふたりの魔導少女が、エリカに耳打ちした。

ママミヤはウインザーチエアから立ちあがり、

「ちがうだろう、勝負は引き分けだ、俺も帰る」

三人を見渡してから、エントランスへと歩いていくと、

「待ちなよ審問官さん、ふたりはナイフを片づけてきて」

はいっ、とキャロルとチハヤがいつて、ナイフを引っっこ抜くとキツチンへと姿を消した。

「また、わざと負けたようね、ソルベが失敗するのを見届けてから？」

「いや、意味がわからないが」

「冗談いわないで、ふたりの魔導少女の動体視力、貴方方とかわらないこと、忘れたの？」

「……」

「貴方、一瞬、柄をつかんだそうじゃない？ 精確にね、ソルベの失敗を見届けてから、瞬時にまた手放した、ホント、器用なこと……」

…なさるのね

「あのふたり、乱視なんじゃないのか」

「勝者は貴方よ」

「よしてくれ」

「見たく、ないの？」

ママミヤが顔を真っ赤にして、

「あ、あたりまえだろう、正式に異性交遊許可証の発付されていない女子を相手にっ」

「じゃあ、かわりに残念賞をあげるわ」

エリカはいっやいなや、両の手をネグリジェの裾に入れ、裾をたくし上げ、純白のショーツを一気に引きずりおろしてくる。

ママミヤが咄嗟に両眼を背ける。

「やめてくれっ、なっなにをっ」

エリカは太もも二本をかるやかに動かし、両の太もも、ふくらはぎ、足首から、

しなやかに白い二本の脚を踊らせ、ショーツを脱いでしまった。丸めると、マミヤに放った。

少年が両手で受けとめる、思わず、受けとめてしまう。

少年は両眼を、ぎゅっ、とつぶり、両手の中にあるものを見ないようにして、

強く、強く握りしめていた。ショーツにはやさしいぬくもりが残っていた。

マミヤにはそれが灼熱の痛みに感じられた。まるで掌に太陽を握りしめているかのように。

「いっておくけど、男の子にこんなコトするの生まれて初めてなんだからね」

「……」

「お好きに使っていいから、おやすみ曹長さん、今夜寝れたら、の話だけれど」

「っ」

少年は悔しさと、羞恥と、目の前のうつくしい少女へのこらえようのない想いを胸にして、唯、唇を噛みしめ、見返すほかなかった。少女は、少年のすべての想いを受けとめるかのようにして、微笑んでくれていた。

「それと、学校では馴れ馴れしくしないでよね、約束よ？、私って基本、審問官は嫌いだから」

「……異端審問獵騎兵だ」

少女は、くすっ、と目をほそめ笑顔をこぼしてから、寂しげに、

「いっしょよ」

つぶやいた。

マミヤ曹長はエリカをひと睨みして、それからエントランスを抜け、

外へ、ユリスモールカフェの外へとしゃにむに走り逃げ出してい

った。

エリカは、マミヤの後ろ姿を見送った。

内扉の鍵を掛ける。途端に。

くたつ、とその場にへたりこんでしまった。

両手で、ネグリジエの裾をきつく引つつかんでいる。

まるでそうすれば、投げ渡したショーツがまた舞いもどってくる
とでもゆうかのように。

キッチンから、キャロルとチハヤが出てくる。

キャロルは忍び笑いを漏らしていた。

チハヤはとんでもない？恋の超強敵？ライバルのエリカをまえに
して、すでに涙目だった。

「OKーっ、上出来だったよーっ、雑誌のマニユアルどおりっ」

そういつて、手にもっているEペーパー　紙状の極薄携帯端末
をひろげて見せる。

紙面には、ダウンロードされたコンテンツのデジタル文字が躍っ
ていた。

《この夏本番！　彼氏ゲット大作戦！》

派手なロゴでそう謳い文句がならんでいる。

エリカはそんなキャロルにすがりつくような視線を送った。顔は
真っ赤つかである。

「っ、恥ずかしいっ、やつぱりこんなマネするんじゃないっ」

そういつて、両の瞳に涙を、本気の涙をにじませる。

キャロルが呆れ、ため息をついて、

「いまさら何いつてんのっ」

「だって、だいじょうぶかな？　私、彼にどう思われたかな？」

エリカの声は不安をとおりすぎて恐怖に震えている。

まるで彼氏の写真を手にフルヌードでニヤニヤしていると「うるを
彼氏その人に見られちゃった、

そんな醜態を晒した少女のように。

さっきまでの威厳はどこへやら、だった。

ママミヤ、カゲラ姉さんに連行される

翌日、ママミヤはとうとう一睡もできず、寝不足で憔悴しきって登校してくる羽目になった。

ナホやクラスの親しい連中から魔導の訓練でもしてたのか、そう聞かれたりした。

ママミヤはデスクに突っ伏したまんま、

「なにも聞かないでくれ」

そういつて、またやつれた眼で遠くを見つめるのだった。

初夏の、窓の外の景色を。

まるで長いギャンブラー人生、カジノでついにロイヤルストレートフラッシュを出してしまったディーラーのような、燃え尽きたような、幸運を使い果たしたような、そんな表情だった。

「なあにー？　ひとり黄昏れちゃったりしてえーっ」

ナホは事情がさっぱりわからず、困惑しているようだった。

そんなナホの質問攻めをかわしつつ、午前の授業は過ぎていった。昼休みの時間、ランチタイムになった。

学校食堂のフロア内、一五年次生の独占する南テラス方面は、遮光ガラスで暑熱をさえぎられ快適そのもの。

清々しい夏の陽差しを独占できる上級生の定位置である。

ママミヤは、オートマティックでトレイに料理を盛りつけてくれるマシンの行列にならんだ。

自分のランチが配給されると、すぐさま北側、一三年次生の集まる陽のあたらないエリアへと突きすすんでいった。

四人掛けのテーブルがいくつも横にならんで、生徒たちが和気あいあい、うれしげにランチを楽しんでいる。

ママミヤの姿を見つけると、途端、声をひそめてしまう。

それから一転、あちらこちらから押し殺した声がわきおこり始める。

異端審問獵騎兵のマミヤ曹長だつ、スゲえなあ、ぼくもなりたいたいなあ獵騎兵つ、でもあの人カド番だよ、とかそんな、あこがれ、好奇心混じりのひそひそ声が聞こえてくる。

マミヤは、いちばん男子のたむろしているグループを見つけた。突進する勢いでむかつた。

グループのいかにもスポーツやってますって感じのスマートな一三年次生たち。

彼らがマミヤを見ると、

マミヤ曹長に敬礼つ、と軍隊ごっこであこがれの念を表してきた。

「すまないが、彼女とふたりつきりにしてくれ」

ざわざわ、とさらに一騒動がおきる。

マミヤ曹長が早くも俺たちのマドンナ、エリカさんに目をつけたぞつ、

そんな男子たちの落胆、悲鳴、羨望……ささやきの数々。

一三年次の坊主どもは肩を落として散り散りになっていく。

遠巻きになって、こっちの様子をちらちら、うかがってくるばかりだ。

マミヤは人払いをすませると、北側の窓際テーブル席に陣取った。

正面にいる女子は、一三年次生。

先週帰国してきたばかりの転校生にして超美少女……。

「きのう……アレは、その、非常に困ってしまった」

エリカはゆつたりとくつろいで、席に座っている。

窓外の景色を眺めていた。

学校のキャンパスに植えられた並木が、緑も鮮やかに風に揺られていた。

七月の光の降りそそぐ平穏な昼。

ゆっくりと、気怠い仕草でこちらに貌をむけてきた。

「天下の審問官様でも狼狽することがあるのね」

「獵騎兵だ……からかわないで欲しい」

エリカは、くすつ、と笑みを見せて、

「お気に召すと思ったんだけどなあ」

ママミヤは周囲をうかがいつつ、

「アレは君に返す、自分には異端審問獵騎兵として、規律ある人生をだな」

「わざと」

エリカが正面切つて顔を間近によせてきて、声をひそめると、

「わざと一四連敗してきた貴方がいまさら？　いまさら？

どのツラ下げて獵騎兵の心得を説くというのかしら」

ママミヤは迫力に気圧されてしまう。

この避難所サバトのキッチンで働くイチ美少女をまえにして。

「そんなに困るコトかしら？」

エリカは、ランチのアメリカンクラブハウスサンドイッチをひと口かじり、また物憂げに窓の景色に瞳を転じてしまう。

ママミヤは美少女の横顔を、途方に暮れて眺めるしかなかった。

「……当然だつ」

ママミヤが頭を抱えこんだところへ、

「あ~~~~~ら、も~~~~うっ、ここにいたのママヤくん~~~~
~~~~っつ」

脳天気な、二〇代ぐらいの女性の声が近づいてきた。

ママミヤが顔を上げる。

げんなりした顔をうかべた。

ゴミンゴ姉さんだった。

本名はカグラ。遠くから見るとなかなか美人だけど、間近で見ても妙齡の美人だった。

きのうのチハヤの覚醒事件のとき、トンスラぶっこいたあの護民官である。

「さあママヤくん、お姉さんといっしょに良いところへいきましょ

っ

「その、カグラ護民官殿」

マミヤが頭痛を頂点にしながらいった。

「あ〜らしいのよいつものように？ゴミンゴツ？って呼んでくれてもねー、ともかく」

マミヤの耳元に口をよせ、

「ユリスモールカフェは秘密の避難所サバトなの、

人権護民局の縄張りだしねー、異端審問獵騎兵の君にこられちゃマズいし、

それにあのショーツ

マミヤが立ちあがる。

「カグラ護民官殿、自分は、自分はその、あの、この件に関して

」

「わかってる、わかってるっ、さあ、無許可の不純異性交遊の容疑で身柄を拘束しまーすっ」

カグラ護民官に腕を引っぱられ、連行される羽目になってしまった。

「なんだかわからないけれど、いつてらっしやい」

エリカの妙に冷めた　ほんとうにお芝居ががっているぐらいに

素っ気ないお見送りを背に受けながら、マミヤは学食フロアを美女といっしょに歩いていった。

サバトは人権護民局の直轄化にある。外部との連絡の一部始終は報告される決まりだ。

どうやら、エリカの口から、護民局のカグラへとすべて筒抜けの様子だった。

少女から少年へと、宙を舞い、渡されたあの純白の、危険物のごとも。

思春期の少年に、第一級アーデルハイド暴走すら起こしかねない、魔法のアイテム。

少年の自室、ベッドの中限定ではあったけれども。

フロア中央の大階段のところで、ナホとソルベたちが取りまき連中とともにやってきた。

「あらソルベ中尉、ごきげんようっ」

「こんにちはカグラ護民官殿っ、なにゆえマミヤ曹長を拘束なされたのでっ？」

「いろいろワケありなのよんっ、あ、君は問題ないから安心していてよろしいっ」

ソルベはそれを聞いて、

「あ、安心いたしましたっ」

バカ正直に胸をなで下ろすソルベに、ナホが激怒した。

「ちよっとおおおおっ、アンタってば、自分さえよけりゃあそんでいいのおおおおっー？」

「ん？ あたりまえじゃないか暴力女？」

「うっさいわねっ……信じらんないっ、なんでマミヤだけ  
「  
そこで血相を変えて、

「まさか、マジで不純異性交遊？ 学校に無許可で？」

ナホはシヨックを受けた様子で、ただ、ゴミンゴ姉さんに連行される愛しの幼馴染みを見送るしかほかになかった。

フォツカーM？F/Aモデル110（第1異端審問獵騎兵連隊・大隊格納庫にて

マミヤは格納庫の電源スイッチを投入した。

高い天井、LED照明灯がつぎつぎと点灯してゆく。

ひろい格納庫だ。

時刻、二三一〇（ふたさんいちまる）時。

長い廊下、左右には獣たちが、魔導二輪装甲車輛だ、  
ヤクトフロント

獵犬どもがずらりと駐機している。

左の列、格納庫のドアから数えて三騎目。

マミヤの愛騎が、密やかに咆吼をあげるのを待っていた。

装甲のカラーリングはサーキットブルー。

第一異端審問獵騎兵連隊隷下、第一大隊、第一中隊、第一小隊、  
第三班。

マミヤの所属部隊だ。一、の数字のならばのは、彼がエリートの  
証、

そう、それはかつてのエリートの証。

ここは第一大隊専用格納庫である。

サーキットブルーは自分の小隊カラーだ。

小隊隷下の三個の班、各班に一名の獵騎兵パイロット。

こいつ専属の整備兵一名。

以上二名で一班を構成する。

こいつ 制式名称、フォツカーM？F/Aモデル一〇。

ドイツと日本の共同開発車輛。

F/Aとは、戦闘及びミサイル攻撃型を、モデル一〇とは一〇

〇〇を掛けあわせて、一二万を意味する。

魔導爆燃機関を毎分、一二万アーデルハイドまで安全回転できる  
機体性能ってゆうわけだ。  
レッドゾーン

それ以上の回転域は危険領域、

そう呼ばれている。

全長三一九〇ミリメートル。

乾燥重量四三〇キログラム。

機体の横、後方装甲板左横にエンブレムの塗装。  
シートカウル

黒地に赤い髑髏が魔女のホウキを噛み千切っているデザイン。

第一異端審問獵騎兵連隊のエンブレムである。

鋼鉄の獣のまえ、鼻っ面の先でマミヤはあぐらをかいて相対していた。

マシンとおなじカラー、サーキットブルーのマギアパンツァーを着用している。

「なあ、あのさ、フォッカー……」

マミヤは愛騎にひとり、語りかける。

少年のその貌は、とてもおだやかなものだった。

「ゴミンゴ姉さんのヤツがさ、俺に無理難題ふっかけてきたんだよ」  
獣は沈黙したまま、マミヤのまえに唯、その巨躯を固定スタンドにあずけ、静まりかえっている。

マミヤが立ちあがり、騎乗した。

手にしていた、あの金属製のピルケースから？魔導石？を一錠出して噛み砕いた。

瞳が、全身があの蒼白のオーラに包み込まれてゆく。

コクピットのコンソール、血液認証パネルの上に親指を押しあてる。

ほんのわずかな血液が、パネルから打ち出された採血針によってマシンに流れこむ。

遺伝子解析がおこなわれ全システム、起動準備を開始。

『キュインツ、キュツ、キュイイイイイイイイイイイインンン  
ンンンンンンンンンツツツ』

愛騎が起動した。

起動時の、金属の擦れ合う、かるやかな高音が格納庫の壁に反響する。

クラッチレバーを握りしめ、アクセルグリップを回してゆく。  
マミヤの両の瞳、光彩が爛々と輝く。

その強さを増し始める。

少年の発する？人工の魔導エネルギー？とマシン本体の燃料タンクにセットされた魔導石、

そのふたつのパワーが相手を認識しあい、共振を始め出す。

パイロットと魔導二輪装甲車輻、二種類の魔導エネルギーの共振したときこそ、マシンの走行性能も、武装のコントロールも、すべてのスペックを十全に発揮できる。

そう、魔導エネルギーの、蒼白色のパワーを。

魔導メーター、その回転数が上昇を始める。少年が歯を堅く食いしばってゆく。

……五四七、

一八三九、

五八九二、八九九四、九九七三。一万〇〇九四。

六秒で一万を超える、魔導爆燃機関、臨界を突破、走行可能域に突入する。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオウウウウウウウウルルルルルルウルルンンンンンッッッ』

音が変わる、爆音にとってかわる。

さらにアクセルグリップを回す、

スロットル開度を全開へ。

第一六戦目でキャロルと対戦したとき三万がやっと、それだけしか出さなかった。

出そうとしなかった、  
それがいま。

三万五七八一、  
四万八九〇六、  
五万七八九九、七万二〇五五、一〇万九〇四三……………。  
一一秒で一〇万オーバー。

魔導メーターが跳ね飛ぶ勢いで上がる、上がりつつける、  
危険領域までぎりぎりのところへ。

全身の生気を、魔導エネルギーを吸われる、獣に喰われる感覚、  
生き血を啜られてゆく感覚に近いものがある。

後方、排気口から蒼白の炎が、彗星のように尾を引いて噴きだし  
ている。

少年と魔導爆燃機関の魔導石のパワーが混じりあい、文字どおり  
燃焼し、消耗していった。

アクセルグリップをもどす。

下がる、魔導メーターは一気に下がっていった。

爆音は止み、排気口の彗星天体ショーも終わった。

『キュウウウウイイイインンンウウウウウッ、キンッ、  
キンッキンッ……キンッ』

水冷システムが魔導爆燃機関を冷却、冷温停止状態のステージに  
移行させる。

独特の、金属を鋭く弾くような音が鳴り始めた。

金属音は終息してゆき、冷温停止状態へ移行完了。  
クラッチレバーをもどす。

かるやかな拍手が鳴った。何度も打ち鳴らされてくる。

格納庫のドアのほうから、だった。

マミヤは騎乗したまま、右手のドアをふりむいた。

カグラ護民官が独り、拍手をしていた。

こちらへ歩きながら、

「きょう一日、お付き合いただき恐縮です」

声には、中学校でみせるお遊びの雰囲気は微塵もない。

マシンのそばまでやってくる。

マミヤは両手、両脚をだらり、放り出した感じで騎乗していた。

「魔導メーター、排気音から察するに――一秒台で回転一〇万オーバ

ー、お見事です曹長」

「カグラさん、それくらい真面目に授業すればいいのに」

カグラ護民官はすこしだけ微笑んで、

「真面目にやってもやらなくても、みなさんは聴いてはくれませんか」

沈黙がおりた。

マミヤは大人の美女をまえにして、語るべき言葉をなんとかして紡ぎ出そうとしていた。

カグラは、それを待っていてくれる風情だった。

話してもいい、このオトナになら、

それがマミヤの結論だった。

きょう一日、彼女と話し合い、そしてマミヤの考えた末たどりついた答え。

「……ときどき、ちょっと、わからなくなることがあるんです」

「なんででしょう?」

「俺たち、なにをしてんだろっ、って、なんでこんな凄いマシンに乗ってまで、女の子たちをおっかけ回して、その……」

「ホウキをへし折る行為をしなければいけないのか、ですか?」

「……そうだよ、授業では絶対話さないよね? 獵騎兵たちが、勝利後に少女たちにする? 身体検査? のこと」

「ええまあ、人権上、グレーゾーンを遥かにぶつちぎってますから  
ママはただ、力なく頸をふるばかりだった。」

カグラは毅然とした態度で、

「魔導少女症候群、

正式には？グレコイグレスシアス症候群？を発症した少女には、  
かならず胸から太ももにかけての肌のどこかに痣が生じます、  
通称、悪魔の紋章、この痣の消滅が、症候群の完治を意味します、  
現場にて速やかに紋章消滅の存否を視診にて確認すること、

この医療行為は希有な特例として異端審問猟騎兵たちに厚労省よ  
り認可された権限です」

彼女のよどみのない言葉、その一言一句にママはうなずき返し  
ていった。

「そして痣を消滅させるには、

少女たちの発する魔導エネルギーを消費させつづけるしかありま  
せん、

それ以外方法は無いのです。

彼女たちに必死になってもらうには、競争が、負ければ？罰ゲー  
ム？の待ち受ける苛烈な競争が欠かせません。

そのためのインター杯、そのための視診です。

せめてうわべだけでも人権を守った上での、ぎりぎりの処置です」

「それだよ、その視診が俺たち隊員の原動力なんだ、

みんなその瞬間、女の子を………したいように………する瞬間に飢え  
てる、

だからこんな危険な任務をしてる、

軍政府公認の賭博の対象にまでされても、それでもつづけている  
んだ、

勝てば賞金ボーナスの支給付きでね」

「心中、お察しします」

カグラが頭を下げてくる。

そんな彼女を横目に見ながら、マミヤは視線を床面に落として、

「初陣は、勝利の瞬間、最高だったんだ、

魔導少女のホウキをへし折ってやるのが、痛快でたまらなく快感だったんだ

……自分は、正義の、社会秩序の番人なんだ、ってバカみたいに思ってたんだ。

それが二勝目で嫌になった、

女の子が泣きだした瞬間、俺は……」

「……」

「……俺は……ゾクゾクきたんだよ、

女の子の涙を見て、一層ホウキをへし折ってやりたくなった、

どうしようもない衝動だった、

あの女の子の着てるパンツァーをひんむきたくってしょうがなく  
なっただ。

……俺は、最低の……クズだったんだ……いまも、それは変わらない  
「

「ご自身をお責めになることはありません、

彼女たちは要治療対象者です、

社会の治安維持のためにです、

覚醒時の危険な重力波爆発、中学校で先日ご経験されたはずですよ」

「カグラさんは真っ先に逃げだしちゃったけどね」

「はい、私には生きてやり遂げる任務があります、

勇敢な獵騎兵殿が二名もいらっしやいましたので、現場をお任せ  
いたしました」

「汚いなあ、オトナって……いっつも」

「己自身の身の内にある清濁をいかに見極めるか、これが大人の指標です」

「……」

「改めてお願い申しあげます、

曹長、？魔導の姫？との試合にエントリーなさってください、

その後は我々が手筈を整えます。

あの少女に勝てるのは、現在、世界中で貴官をおいてほかにはありません、

？あの少女の命を救える？のも、貴官をおいてほかにはおりません」

深く、カグラは深く、礼を尽くし頭を下げてくる。

マミヤは、コクピット、左右のグリップを握りしめた。

魔導メーターを見つめる。

いま目盛はゼロの位置にあった。

時計回りに一、二、三……目盛の一がアーデルハイト一万魔導力場展開を意味する。

……一〇、一一、ここを過ぎると表示が赤く塗られている、レッドゾーン危険領域を示す目盛だ、

一二、一三、一四、一五。以上。

一五……絶対危険領域、一五。

その最高値を見つめつづけながら、

「……闘うしかないんですよね？」

？魔導の姫？と、彼女の？希望の悲鳴？と？ゲシュユライ・トラウム」

マミヤは、自分自身に問いかけるかのようにつぶやいた。

「はい、曹長」

「きょうカグラさんが教えてくれた話、すぐには、やっぱり信じられなくて……」

「無理ありません、ですが」

「いいよどむカグラを見て、マミヤがやさしく微笑んだ。」

「だいじょうぶ、大隊格納庫には盗聴器こくの類はないですよ」

「ですが我々の内偵調査の結果、ほぼまちがいは無い、そう断言いたします」

「……ほんとうに？」

「はい、軍政異端審問局は本気です、

大佐は、？魔導の姫の暗殺指令書？に署名を済ませています。

このままでは姫は、つぎのインター杯のレース中、？不慮の事故死？を遂げる運命です」

「そうなる前、に？」

「曹長にお勝ちになっていただく意外、姫を救える道はありません」

格納庫の壁、デジタル時計があった、

いま日付がかわった、〇〇〇〇（まるまるまるまる）時の電子音が、格納庫内に鳴り響いた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0037y/>

---

駆ける、姫に賭ける！

2011年11月2日03時11分発行